

## 三世代家族における嫁の位置 佐渡における嫁の役割変化から一考察

呉 賢 櫛

### 要 旨

本 論文에서는, 일본에서 等한시 되어 온 세탁 등의 가사노동에서 보이는 며느리와 시어머니, 그리고 시할머니의 역할을 세대별로 그 차이를 명확하게 나타냄으로써 각각의 지위를 보고자 했다. 이러한 시집에서의 역할을 태평양전쟁 전과 전쟁 후의 두단계로 분리구분함으로써 고찰한 결과, 전쟁 전의 역할과 전쟁 후의 사이에 일어난 역할의 변동이 며느리의 지위에 커다란 영향을 준 것을 볼 수 있었다.

즉, 전쟁 후에 보이는 며느리의 역할에 기존의 주부권이양이라는 주부관념이 없음에도 불구하고, “주거의 권리” 라는 주부로서의 역할이 포함된 권리등이 이양된 것을 확인 할 수 있었다. 그 결과, 며느리에서 주부로, 주부에서 시어머니의 단계로의 지위변환이 애매하게 된 점을 지적함과 동시에, 전쟁 전의 야나기타 쿠니오의 주부관념과 주부권 등, 주부지위의 문제점과 전쟁 후의 며느리의 지위에 관한 상대점을 지적함으로써 며느리의 지위는 보편적이고 절대적인 것이 아니라 시대에 따라 변환한다는 것을 지적할 수 있게 되었다.

キーワード……里帰り 佐渡 石名 嫁 主婦権

### はじめに

里帰りという民俗慣行に反映された家と嫁との関わりの様態を把握するため、筆者は修士論文において、嫁の長期里帰りの変化と主婦権移譲との関係に注目して考察を行った。その結果、これまで度々指摘されてきたように婚家における嫁への主婦権移譲が里帰りを終了に導いていたのみならず、嫁の里方における主婦権移譲も嫁の里帰りを終了させる要因として作用していたことを指摘した。つまり、既存の研究では等閑視されてきた里方でのカカユズリも、考察の対象に組み込むことの必要性を指摘したのである。そしてこのことを通じて婚家における嫁という側面だけでなく、嫁に出た娘と里方との関係という側面をも捉えることにより、家と嫁の問題をより包括的に捉えることが出来るであろうことを指摘した。

ところで、筆者の修士論文では、家における嫁の役割の変化や、このような役割変化に伴う

### 三世代家族における嫁の位置（呉）

家における嫁の位置変化については、さほど考察を加えることができなかった。

本稿は家における嫁の役割変化という側面に焦点を当てて考察を加え、嫁の役割変化と家との関わりを明確することを目的としている。即ち、既存の研究のように主婦権による嫁の位置（地位）研究ではなく、日常生活の中から嫁の位置変化を把握するのに民俗学的な意義がある。

ところで、本稿でいうところの「嫁」とは、三世代同居家族の中での嫁を指しており、具体的には大婆（婚家の祖母）・中婆（婚家の母）に対比させたところでの嫁のことである。また、嫁の役割についての考察に当たっては、嫁が婚家の一員として認められる主婦になる前の段階と、主婦になった後の段階の二段階に分けた。そして、本稿でいう「嫁の役割」とは、主に三世代同居家族における嫁の役割のことを指しており、「洗濯」とは文字通りの washing clothes の事を指している。

なお、本研究は、佐渡郡相川町石名で暮らしている嫁を対象とした聞き書き調査から得られたデータに基づいて、戦前（昭和20年まで）と戦後（昭和20年以降）に分けて考察を行う。

#### 1. 嫁の役割に関する若干の考察

かつての民俗学研究において、家における嫁の役割に関しては、女性の一般的問題の一部として取り扱われてきた。すなわち、女性は結婚をすれば婚家のために奉仕するのは当然なものと認識され、このような考えのもとでは女性が家事をするのは当然であると見なされていたため、これを研究対象とすることにさほどの意義が認められなかったためではなからうかと思われる。すなわち、女性が結婚した後、嫁としての役割を担うのは当然のことと考えられていたため、そのことに対する問題意識が十分に発展しなかったと見られるのである。そして、女性は結婚をすれば生活時間の大部分を家事に潰し、女性が家事に携わる比重が非常に高いという現実が存在していたにもかかわらず、女性の家における役割についての研究は、他の研究テーマに付随する問題として取り扱われる状況が続き、研究の対象として正面から十分に取り扱われることは少なかった。

ところで、柳田国男は伝統的農村社会における女性の役割について、次のように述べている。「もともと農業の労働は現在のような力業ではなかった。……従って女でも充分にできた仕事であった。……すなわち以前は女が農業に参加していた部分は今よりはるかに多かったのである。むしろ農業というものは女だけの仕事であったのではなからうか。その一つの暗示として今日の未開人社会に幾多の実例を見出すことができる。わが国においても漁村の稲作などにはまだ充分痕跡が残っている<sup>1)</sup>。」

農業が「女だけの仕事であったのではなからうか」というこの柳田の記述は、筆者が調査を行った石名の場合にも当てはまることである。かつて、石名において農作業は主として嫁の役割とされていたからである。

嫁の仕事については、婚姻の様式によって異なりを見せる。大間知篤三は伊豆の大島のアシイレ婚の事例をもとに、嫁の役割について述べている。つまり、アシイレを済ませた後も嫁は生家にとどまりながら、毎日朝晩婿方へ水を汲みに出かけ、それが「嫁のツトメ」であったという。そして、それが「その家の嫁であることのあらわれ」であったとも言っている。この「嫁のツトメ」は大体三ヶ月か半年位で、早く嫁が婿方の家風をのみこみ、妊婦にならないうちに「結婚式（引き移る時の式）」を挙げられるように里方では心配をしていたという。ところで、この大間知篤三の論文では、嫁が主婦<sup>2)</sup>になるまでの記述は見られるが、「結婚式」後の嫁の役割には言及されていない<sup>3)</sup>。

嫁の役割変化について、柳田國男は昭和16年に『婦人公論』誌上に連載した文において、「現代は誰でも年さえ取れば、皆おかみさんになれる代りには、これと違って際立った職分もなくなり」と当時の状況を指摘しつつ、「主婦の権能の縮小したのは、ひとり家の大きさの差からだけではなく、第二にはまた家の職業の増加にもよります」と言っている<sup>4)</sup>。これは生業の変化に伴う嫁の役割変化に言及した部分である。ここで柳田國男がこのような「主婦の権能の縮小」要因は、当然地方ごとに相違があったであろうし、事実、石名においてこうした変化が現れるのは戦後のことであった。

また、婚家における嫁の位置を象徴的に表わすものとして、洗濯がある。それは、向山雅重は信州伊那地方の「せんたく」について記述するなかで、「嫁が洗濯をするときには、お許しを得る必要がある、つまりその時間だけお暇をいただいてすべきである」という話や、「洗濯などしているものは一人前の人間ではない」という話<sup>5)</sup>を引用しながら、婚家における嫁の立場が一貫して弱いものであるという考えから、嫁の洗濯を理解している<sup>6)</sup>。このような見解は、かつて嫁の生活を人々がどのように見ていたかという認識構造を知る上で参考になる。

また倉石あつ子は、里方に帰るセンダクではなく、洗濯と主婦権<sup>7)</sup>との間に関連性が見られるとして、「婚姻後嫁が洗濯を婚家でできるようになるという状態は、姑から主婦の座が譲られることと対応」していると指摘している<sup>8)</sup>。しかし、佐渡においては、少なくとも戦前は嫁が婚家で洗濯をすることは、決して容易なことではなかったという。そして、嫁は婚家の許しをもらって洗濯をする場合でも、隣家に物音が聞こえないように夜こっそり行っていったという。なぜなら、こうした事実を知ると、隣家でも嫁が家で洗濯をすることを許さなければならない状況が生じてしまうからであり、隣家の主婦の立場を思いはかっていたことだったという。

婚家で自分や子供の服の洗濯が出来ない嫁の場合は、洗濯物が貯まると婚家から暇をもらって、里方に帰り洗濯をしていた。当時、里に帰って洗濯をしていたということは、すなわち嫁が婚家の一員になり得ていないことを意味していたのであり、嫁が婚家で家族の洗濯ができるようになることは、婚家の一員として認められたことを意味していた。このように、嫁は婚家において弱い存在としてあった。そして、嫁の婚家での位置を明確にするため、洗濯を研究対象として取り上げて考察することには、それなりの意義が認められるのである。

表1. 調査地：新潟県佐渡郡相川町石名の

年齢階層別人口 (人)

	男	女	計
15歳以下	10	2	12
16～20歳	4	3	7
21～30歳	1	4	5
31～40歳	5	7	12
41～50歳	8	7	15
51～60歳	8	8	16
61～70歳	13	23	36
71歳以上	16	29	45
計	65	83	148

(1999年1月現在 筆者調べ)

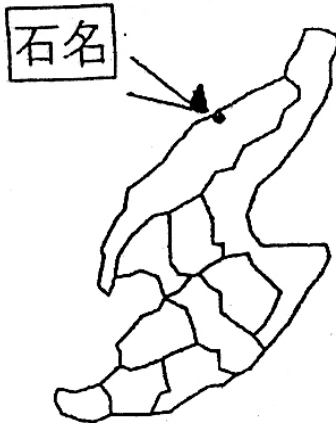


図1. 調査地：相川町石名の位置

## 2. 石名の嫁と家

### 2-1. 調査地の概観

石名の村の起源は、「北」や「南」という屋号を持つ家<sup>9)</sup>に発すると言われている。「南」や「北」と呼ばれる家は、かつては村の総代として存在していた。クンジも行われていたが、今ではほとんど行われなくなっている。クンジとは本家に労働奉公に行くことである。今もクンジを行っている家としては、「南」が残っているだけである。クンジの仕事としては、海に出たイカ釣り漁船などが大漁の時や、農繁期における手伝いなどがあったという。しかし、「北」に関しては、村ではその存在感さえ薄れてしまっているように見える。村では、分家のことを「インキョ」や「インキョー」という。しかしこれは、いわゆる親のインキョではなく、次男・三男がインキョすることを意味する。石名では本家・分家の繋がりよりも、婚姻による結び付きの方が強い。1961年に佐渡在住の研究者佐藤利夫<sup>10)</sup>が行った調査によれば、石名における村内婚世帯は41軒で、これは石名の全所帯数の75.9%に相当する。これは当時の新潟県全体の平均値5.6%に比べて、遥かに高い村内婚率を示している。このように石名で村内婚が多く見られるのは、村全体を一つの親類集団として維持しようとする村民の意思が働いていた結果であって、村内婚の盛行に伴う密度の濃い姻戚関係の維持によって、村の結束が強められてきたといえる。

石名の世帯数は1999年現在51戸が確認されるが、そのほかに親が隠居して別の棟を持っている場合や空き家が5戸あるので、実際の世帯数としては56戸が確認される。親の隠居は、嫁

に負担を与えないために行われるものである。家族構成を見ると親子の二世帯家族が 41 戸、親子と孫を含む三世帯家族が 2 戸、このほかに独居者が 8 戸ある。

職業構成は、専業農家 9 戸、兼業農家 33 戸、その他 9 戸となっている。また、石名の農家一戸あたりの田畑面積は 5 アール以下が 2.4%、5 アール以上 1 ヘクタール以下が 28.6%、1 ヘクタール以上 1.5 ヘクタール以下が 64.3%、1.5 ヘクタール以上が 4.8%である<sup>11)</sup>。

なお、「昭和 30 年高千農業委員会個人別耕作面積調査」によれば、当時、石名の農家戸数は 62 戸となっている。

村の全人口は 1999 年現在 148 人である。このうち、明治生まれが 4 人（男性 1 人、女性 3 人）、大正生まれが 41 人（男性 15 人、女性 26 人）、そして昭和・平成生まれが 104 人（うち、戦前生まれは男性 21 人・女性 31 人、戦後生まれは男性 28 人・女性 23 人）である。

村の年齢別人口を見ると 71 歳以上が男女合わせて 45 人、61 歳以上 70 歳までが男女合わせて 36 人で、村全人口の過半数を超えるが、高校生以下の人口は 17 人で、その内訳は男性 14 人、女性 3 人となっている。このように石名では若年層人口が少ない（前掲「表 1」参照）。また、婚家における嫁の役割については、独居者を含む二世帯家族、及び三世帯家族における石名の嫁 47 人による聴き書きに基づいている。

## 2-2 . 通婚圏

1999 年現在石名の夫婦 62 組のうち、44 組が村内婚である。女は村の外に嫁に行くよりも、村内婚を行って村の中で暮らし続けることの方が望まれていた。里方の親が病気などで弱っている時、娘がその病弱な親の面倒を多く見ることが多いということも、その理由の一つである。また、石名の近隣の村に嫁に行く場合、石名の北方向（「しも（下）の方」）の外海府へは嫁に行く事が望まれなかった。これらの村の家々は貧しくて嫁仕事もきつかったからである。一方、南の方向（「かみ（上）の方」）にある相川は佐渡では大きな町で、娯楽や気分転換をする機会にも恵まれていたため、娘たちの間では同じ嫁に行くなら南方向の方が望まれていた。男は後継ぎである場合は村に残るが、次男や三男は今も大部分が村を出る。

石名における婚姻関係などに基づく村人同士の付き合い関係の詳細、および石名の通婚圏については、下掲「表 2 . 通婚圏の地域別・世代別一覧」に整理して示した。

三世代家族における嫁の位置（呉）

表2 通婚圏の地域別・世代別一覧

出生地別分類

	生まれ 通婚の範囲		出生地別分類			
			明治・大正	戦前 (昭和20 年まで)	戦後 (昭和20 年以降)	計(人)
村内婚	石名部落		18	18	8	44
村外婚	佐渡島内	小野見	0	1	0	1
		高下	1	0	0	1
		石花	0	0	1	1
		小田	0	1	1	2
		大倉	0	1	0	1
		相川	0	0	3	3
		佐和田	1	0	0	1
		羽茂町	0	0	1	1
		関	0	1	1	2
		両津	1	0	0	1
		金井町	0	0	1	1
	新潟県内	松之山	1	0	0	1
		村上市	1	0	0	1
	新潟県外	群馬県	0	1	0	1
その他		5	0	0	5	
計			28	23	16	62(+5)

(調査にもとづき筆者作成 丸括弧内の数字は里方の把握が不可能)

2-3. 婚姻の成立

婚姻の中でも村内婚の場合、配偶者の選定にあたっては結婚当事者の意見は尊重されず、主に親の意見に左右されることが多かった。配偶者の選定基準には、家格、財産、健康状況などが含まれていた。

石名では炭焼きが盛だったので、多くの若者が炭を焼くために山に入って働いた。炭焼きは肉体的にきつい労働だった。炭焼きに従事する青・壮年たちは山で三日ごとに餅をついたが、これを「ミッカヤマ(三日山)」と呼んでいた。青年たちはこの餅を食べながら仕事に励んだ。

その時、手伝いとして村の娘たちも山に入った。娘たちは、主に材木を背負って運ぶ仕事に従事したので、「ショーイコ(背負い子)」、あるいは「オイコ(負い子)」と呼ばれていた。その時、山の作業空間でおのずと男女間の交際が営まれていた。つまり、山の作業空間は一つの恋愛の場としての役割も兼ねていたのであった。当時、若者にとって炭焼きに従事するということは、肉体的にも精神的にも成熟した「一人前」の男であることの証しでもあり、誇りでもあった。炭焼きの作業場にしつらえられた山小屋での交際で男女がナジミになると、ナジミ

同士の自由な恋愛も深まり、その結果として恋愛結婚に進んで行くケースも見られた。ただし、現在、石名には恋愛結婚をした夫婦は存在しているが、炭焼き作業場でのナジミ関係から結婚に至った夫婦は一組も生存していない。

婚姻年齢にはタブーがあった。女性の場合は19歳、男性の場合は25歳が厄年とされ、この年齢での婚姻は避けられていた。

嫁は結婚式の後、里方の母親と一緒に婚家のとなり近所に挨拶回りをする。里方の母親が不在の場合は、婚家の母親と挨拶回りをすることもある。婚姻が成立してはじめて迎える正月八日の日には、嫁の里方に婿と嫁を呼んで、餅をついたりしてご馳走を振舞う。婚姻が成立すると、嫁の里帰りであるセンダクが始まる。ここで言うセンダクとは、季節の変わり目に嫁が婚家から里方に戻って休むことである。その他、おもに初子を産む場合、出産するために里帰りをする。その後、子供は小学校に入るまで里方で過ごすこともある。

### 3. 家での役割

家族の役割について見てみると、まず大きく男女で役割が分かれていることがわかる。すなわち、家を代表して家の外での仕事を担うのが家長や後継ぎの役割で、家の中での仕事を担うのが母や嫁の役割である。これは家の中と外を基準にして役割が分担されるものである。

しかし、家事と育児は女性の役割、祭祀、経済活動および家の代表者としての活動は男性の役割という分け方で役割分担を考えることもできるが、そうした場合、祭祀に関する役割分担をとって見ても、家の外から来た神の祭祀は家長（男性）が担当し、もともと家の中にいる神の祭祀は母（女性）が担当するというような状況にあり、祭祀は男性の役割と一律的に括することもできない問題がある。また、祭祀が行われるプロセスを見ると、祭祀の執行自体は家長や後継ぎが担当するが、祭祀を行うまでの準備は姑や嫁の役割と考えている家も多い。また、家長が祭祀の供物まで指示する家も見られるというように、家によってさまざまである。このように、家族の役割を一律的な基準で分類することは容易ではない。

以下、石名において、家の仕事の役割分担が、家長と大婆、中婆、および嫁の間で如何なる状況を示しているかについて見てみることにする。

家長は、家の中心的な存在でありつつ、家族の全体を統制管理する命令権を保持しており、また、家の財産を継承している。家長は家や家族の安全や平安を図りながら、外部の勢力から家や家族を守る義務を担っている。前の世代と後の世代を繋ぐ役割も担っている。このように家の活動全体が家長の指導のもとで行われる。このような状況は父系の直系家族において成立する。後継ぎが結婚しても、家の経済権は家長が死ぬまで保持し続ける。村の会議などの集まりには、後継ぎに行かせることもあるという。

女の役割は、大婆・中婆・そして嫁にそれぞれ分担される。大婆は、家に新しい嫁が入って

### 三世代家族における嫁の位置（呉）

くると、嫁に家事をさせながら自分は隠居し、監督権を持つようになる。一定の期間にわたって大婆の仕事は徐々に中婆に移され、やがて嫁に移されていく。このように嫁に仕事の分担がなされて行く中で、嫁は婚家の一員として認められることとなる。

婚家における嫁の役割をより具体的に見てみると、まず、朝4時半から起きて行われる草刈りの仕事を上げることができる。その後、主に大婆の仕事であった朝食作りに必要な水を井戸から汲み上げる仕事や、かまどに薪を入れる仕事を行った。ただし、火の管理は「主婦」の役割であるため、主婦権が未だ譲渡されていない嫁にはかまどに火をつける仕事は許されていなかった。続いて家の掃除など家の中での仕事をした。これらの仕事が終わると、今度は田畑での仕事が夕飯の準備が始められる時まで続けられた。夜も、藁を編んでわらじを作る仕事などをして働いた。

嫁の役割というと、普通、旧来のいわゆる嫁の役割である嫁の婚家での務めのことをいう。これは、家の中においては親に対する奉公や子供の教育、家事、田畑での仕事などがあり、家の外における務めとしては、嫁の身分にかなった行動や、親戚との間の付き合いや信頼関係を維持することなどが上げられる。

しかし今日、石名で嫁が「ツトメに出ている」と表現される時、そこには場合に応じて二通りの意味が読み取れる。たとえば、どこかの家を訪ねて行ってその家の嫁の行き先を聞いた時、「嫁はツトメに出ている」という返答があったとする。この時、嫁は農作業のために田畑に出ていることを意味している場合と、出稼ぎや職場勤務に出掛けていることを意味している場合とがあるのである。嫁が会社に勤務し始めるようになると、会社勤めまでもが嫁の役割の一部として認識されるようになっていた。そして、昭和30年以後になると、嫁が会社勤めのために家にいる時間が少なくなるに従い、従来嫁が担っていた役割を、嫁に代わって中婆や大婆がこなすようになっていった。

戦後もしばらくの間は、家族はそれぞれ別の1人用の膳でご飯を食べていた。舅さんのお膳から順にご飯を盛っていった。嫁の順番は一番最後であったので、御飯が足りなくなったりすると大盛り御飯どころか、茶碗に半分ぐらいしか盛れないこともあったという。ひどい場合、アシレ婚をしたある嫁は、儀式で出されたてんこ盛りご飯を、乙女の恥ずかしさゆえにひと匙だけ食べた経験はあるが、嫁になってからは一度たりともてんこ盛り御飯を食べることが出来なかったと言う。

お膳は棚に収めておいて、食事のたびに取り出して使うようにしていた。お膳は使用するたびに洗うものではなかったという。ご飯を食べた後は、棚の中にきれいに揃えて重ねておく。また、家によって少しは異なるが、子供がいる家では、子供のおしめを洗ってから、山（田畑）に行くのが普通だったという。仕事に行く時には、今日はどんな仕事をするかを姑や舅に聞いてから行った。そして、暗くなるまで山で仕事をしていた。昔は農作業は全て手作業で行っていたため、大変な重労働だったという。畑では豆、大根、人参、コウボウ、ナス、胡瓜、トマ



ト、サツマイモ、ジャガイモなどを作っていた。

このような家の中における嫁の役割は、分類の仕方によって異なった記述になるが、ここでは大きく婚家における役割分担と婚家の主たる生業別に分け、戦前戦後における変化を検討する。まず婚家における役割分担を家事・育児・経済活動・信仰の4つの分類のもとに記述してみる。このうち、家事は食事の準備、後片付け、洗濯(家族全員の洗濯物)、縫い物、部屋の掃除、漬物漬け、夜なべ仕事、水汲みの8項目、育児は子供の世話、子供のしつけ、PTA活動の3項目、経済活動は田での仕事、畑での仕事、稲刈り、収穫、堆肥作り、燃料の準備、家畜の世話、食料品の購入、食料品の分配、出稼ぎの10項目に分けた。また、信仰は堂などの掃除と講などへの参加の2項目に分けた。このような項目は、聞き書き調査の結果から知りえた嫁の仕事の実態を参考にして分類したものである。次の表3はこのような嫁の役割を戦前と戦後に分けて、その変化した様相を表わしたものである。

表3. 戦前から戦後にかけての嫁の役割

嫁の役割		戦前				戦後				
		大婆(9人)	中婆(9人)	嫁(9人)	計(27人)	大婆(9人)	中婆(2人)	嫁(9人)	計(20人)	
婚家での役割分担	家事	朝御飯作り(人)	9	7	1	17	8	1	1	10
		(%)	52.94	41.18	5.88		80.00	10.00	10.00	
		後片付け(人)	0	0	9	9	1	2	6	9
		(%)	0.00	0.00	100.00		11.11	22.22	66.67	
		洗濯(家族)(人)	1	6	1	8	5	2	9	16
		(%)	12.50	75.00	12.50		31.25	12.50	56.25	
		縫い物(人)	0	0	9	9	8	1	0	9
		(%)	0.00	0.00	100.00		88.89	11.11	0.00	
		部屋の掃除(人)	0	1	9	10	3	1	5	9
(%)	0.00	10.00	90.00		33.33	11.11	55.56			
漬物漬け(人)	9	6	1	16	8	2	3	13		
(%)	56.25	37.50	6.25		61.54	15.38	23.08			
夜なべ仕事(人)	0	6	9	15	0	1	9	10		
(%)	0.00	40.00	60.00		0.00	10.00	90.00			
水汲み(人)	0	1	9	10	0	1	9	10		
(%)	0.00	10.00	90.00		0.00	10.00	90.00			
育児	子供の世話(人)	1	7	7	15	1	1	9	11	
	(%)	6.67	46.67	46.67		9.09	9.09	81.82		
	子供のしつけ(人)	8	9	9	26	3	2	9	14	
(%)	30.77	34.62	34.62		21.43	14.29	64.29			
PTA活動(人)	0	1	8	9	1	2	9	12		
(%)	0.00	11.11	88.89		8.33	16.67	75.00			
経済活動	田の仕事(人)	1	8	9	18	8	2	1	11	
	(%)	5.56	44.44	50.00		72.73	18.18	9.09		
	畑の仕事(人)	1	8	9	18	8	2	1	11	
	(%)	5.56	44.44	50.00		72.73	18.18	9.09		
	稲刈り(人)	9	9	9	27	8	2	4	14	
(%)	33.33	33.33	33.33		57.14	14.29	28.57			
収穫(人)	9	9	9	27	8	2	4	14		
(%)	33.33	33.33	33.33		57.14	14.29	28.57			
堆肥作り(人)	1	1	9	11	8	2	1	11		

### 三世代家族における嫁の位置（呉）

	(%)	9.09	9.09	81.82		72.73	18.18	9.09	
	燃料の準備 (人)	1	1	9	11	8	2	0	10
	(%)	9.09	9.09	81.82		80.00	20.00	0.00	
	家畜の世話 (人)	1	1	9	11	1	2	1	4
	(%)	9.09	9.09	81.82		25.00	50.00	25.00	
	食料品の購入 (人)	1	9	1	11	9	2	9	20
	(%)	9.09	81.82	9.09		45.00	10.00	45.00	
	食料品の分配 (人)	9	9	1	19	9	2	9	20
	(%)	47.37	47.37	5.26		45.00	10.00	45.00	
	稼ぎ（出稼ぎ）(人)	1	6	6	13	0	2	9	11
	(%)	7.69	46.15	46.15		0.00	18.18	81.82	
信 仰	堂等掃除 (人)	9	1	1	11	9	2	1	12
	(%)	81.82	9.09	9.09		75.00	16.67	8.33	
	講の参加 (人)	9	1	1	11	9	2	1	12
	(%)	81.82	9.09	9.09		75.00	16.67	8.33	

（この表は1999年から2000年にかけて聞き書きにより作成したのをパーセント（％）として示す。小数点以下3桁を四捨五入し、2桁まで示した。）

以上の事例から次のようなことが言える。

まず、家事について戦前と戦後を比べると、洗濯と縫い物において大きな変化が見られる。つまり、戦前の嫁は縫い物仕事に追われていたが、戦後になると皆無に近くなっている。ここでいう縫い物にはボタンの付け替えなどの単なる針仕事は含まれず、織物だけを指している。

また、戦前において、婚家ではほとんど洗濯が出来なかった嫁が里方に帰って洗濯をするセンダク帰りは、佐渡では民俗慣行として多く見られた。ところで、戦後になると多くの嫁が婚家で洗濯を済ませるようになってきている。朝御飯作りは、大婆の仕事であって、戦前と戦後の間でも大きな変化は見られない。

育児に関しては、子供の世話やしつけにおいて、戦後、中婆の役割が減少している。特に子供の世話の面においては、中婆は手出しできない状態になっている。PTA活動については、戦前戦後を通じてあまり変化が見られない。

経済活動における役割については、戦前に比して戦後になって嫁の役割が低下した仕事の分野、逆に役割が上昇した仕事の分野、及び戦前戦後を通じて取り立てて役割分担に変化が見られない分野に分けて見ることが出来る。

まず、戦後嫁の役割が低下した仕事の分野としては、田での仕事、畑での仕事、堆肥作り、燃料の準備、家畜の世話、夜なべ仕事、および水汲みを上げることが出来る。これらの仕事は、戦前には主に嫁や中婆が担っていたが、戦後になると大婆が担うようになった。

このような役割の移動は、戦後における家の中での嫁の位置変化の問題と深く関わっている。すなわち、戦前、「家の労働力」であったはずの嫁に対して、戦後になるとそのような役割を嫁に期待できなくなっている。その結果、大婆と中婆、および嫁との間で、その役割分担に大きな変化が見られる。こうして、戦前には嫁がもらしていた不平不満を、戦後になると大婆と中

婆の口から発せられるようになった。ここで問題となるのは、戦前は嫁であった世代の人々が、戦後には中婆世代、および大婆世代に移行しているということである。ここで考えなければならぬことは、嫁から中婆に、中婆から大婆になるという鎖がなぜ切れてしまったのかということである。

戦後、嫁の役割が向上した分野として、食品の購入と分配という経済活動を上げることができ、主婦権を象徴的に示すものとしてシャモジがあるように、この食品の購入と分配に関わる活動に嫁がより多く関わるようになったことは、家の中での嫁の位置変化を示すものであった。この際、嫁や中婆が出稼ぎを始めることを通じて生じた経済観念の変化にも注目しなければならないだろう。なお、稲刈りや収穫など共同作業に関しては、戦前戦後を通じて大きな変化は見られない。

戦前戦後を通じて、嫁の役割が大きな変化を見せなかった分野は信仰の面においてであると思われる。そして、信仰に関する活動においては、戦前戦後共に大婆と中婆は比較的良く参加し、嫁は余り参加しようとしていなかった。今日、信仰活動への嫁の参加が低調であるという大婆たちの心配そうな話しも聴くことが出来る。嫁の信仰活動への参加度が低い理由としては、嫁が家から離れている時間が多くなっていることとか、民俗信仰が迷信であるという観念が広まったという側面が指摘されることがあるが、実際には、戦前戦後を通じて嫁の信仰活動への参加度は一貫して低調であった。

婚家の主たる生業別に、嫁の役割が戦前戦後を通じてどのような変遷を示しているかを見てみる事が出来る。そして生業別項目としては、農業を主たる生業とする家の嫁、漁業を主たる生業とする家の嫁、そして炭焼きを主たる生業とする家の嫁に分けて見ることが出来る。これを以下の(表4)にまとめてみた。

表4. 主たる生業による嫁の役割

婚家の主たる生業 戦前・戦後	農作業を主とする	漁業を主とする	炭焼きを主とする
戦前における嫁の主な役割	田畑の仕事、織物(麻、木綿で蚊帳などの織ることなど)。	季節による魚の荷揚げや運搬など。	炭竈の土作り、萱縄作り、木運び(炭焼き用)など。
戦後における嫁の主な役割	田畑の仕事、出稼ぎ(会社などでの勤務を含む)など。	田畑の仕事、出稼ぎ(会社などでの勤務を含む)など。	田畑の仕事、出稼ぎ(会社などでの勤務を含む)など。

(調査にもとづき筆者作成)

上述したように、戦前において婚家の主たる生業によって嫁の役割はそれぞれ相違をみせる

### 三世代家族における嫁の位置（呉）

が、戦後において見られる嫁の役割には生業による相違は見られない。戦前、農作業を担うのは嫁の役割だったので、婚家の主たる生業が終わった後、嫁は田畑での仕事をしていて、特に炭焼きを生業とする家の場合、炭窯に火を入れると三日間焚き続けていたので、夜になってから畑の仕事をしに行くこともあったという。

戦後における嫁の役割は、田植えや草刈りなどの畑仕事に加えて、会社勤めなどが嫁の務めに組み込まれることによる嫁の役割変化が見られるようになった。このほか、佐渡でトンネル工事が行われた時には日雇労働にも出かけるなど、嫁が出稼ぎをする機会が多くなった。（前掲「表3」経済活動の項目参照）。このような、戦後における嫁の役割変化は、嫁の位置（或いは地位）にまで大きな変化を及ぼしている。

## 4. 嫁の位置

家における嫁の位置を把握するにあたって、これといった定まった方法があるわけではない。

戦前においては、嫁は「息子の配偶者」というよりもむしろ「家の嫁」として迎えられ、嫁は家長や中婆や大婆に仕え、その家の家風に従うことが、嫁として果たすべき重要な事と認識されていた。

かつて、中婆や大婆の指示を受けずに嫁自身の意志で家事を行うことは許されず、嫁は婚家のために働くだけの存在であったといえる。このような嫁は、婚家の家族にとってはまるで他人のような存在であり、ひたすら忍従の日々を強いられていた。そんななかで嫁と中婆・大婆との間に緊張関係が生じ、家から追い出される嫁も存在していた。

戦前、石名の嫁は婚家での仕事ぶりによって、周りの人々から評価を下されていた。厳しい労働を伴う農作業も殆んどが嫁の労働力でまかなわれていた。嫁は婚家の「働き手・労働力」として扱われ、そのため婚家にとって「使いやすい」嫁が好まれた。そして、嫁はひたすら「嫁の役割」に専念し、いつも働き者でなければなかった。嫁は婚家で一番の働き者であったにもかかわらず、一番立場が弱い存在でもあった。

嫁の位置変化を観察するに際しては、洗濯、食物の分配、及び食物購入に嫁が如何に関わっているかを見ることは意味のあることである。前述したように、弱い位置にある嫁は洗濯のために里帰りをしており、これに反して婚家で洗濯するようになった嫁というのは、前述の倉石あつ子の説を引いて説明するならば、「主婦の座が譲られ」婚家の一員になっている嫁であるということである。

また、かつては食物の分配と食品購入は中婆や大婆の役割とされていたが、これは主婦権の有無と深く関わっていた。戦後、嫁の役割がこの分野に大きく進出するようになったことは、戦後における嫁の位置の高まりを示している象徴的な出来事と言うことが出来るだろう。

## 5. おわりに

石名の事例から、嫁の役割は戦前と戦後の間で大きな変化が見られたことが分かる。戦前の嫁は婚家に従順で、さまざまな場面で自らの意思を示すことが許されていなかった。そしてひたすら中婆や大婆の命令に従うことが嫁の美德とされていた時代だった。洗濯を婚家で行うことすらも許されない存在として扱われていた。

しかし戦後になると、家の経済活動において嫁の役割に大きな変化が見られるようになったが、それは何よりも出稼ぎや会社勤務などによる嫁自身の経済力獲得、およびこれに伴って従来の家に関連するさまざまな価値観に変更が促されたことによる。

嫁の役割や位置の変化を中婆、大婆との関係で考察すると、次のようなことが分かる。

戦前の家では嫁が農作業の主な担い手だったが、仕事の割り振りは中婆あるいは大婆の役割だった。この点において、嫁と中婆・大婆との間で、家における位置（或いは地位）の顕著な相違が見られた。

戦後の家ではカカユズリ（主婦権の移譲）とは関係なく、既に嫁は食物の分配と管理の役割を担うこととなった。したがって、食物の管理と分配は主婦の役割の中でも重要なものであることから、嫁と中婆・大婆との間における位置関係に曖昧さが生じることになったといえる。このようなことから、嫁と中婆・大婆がいずれでも主婦である戦後と戦前の嫁と中婆・大婆の関係を同一線上で比較することは困難である。

戦前は嫁としての務めを果たした後に主婦（中婆及び大婆）から主婦の座を譲られる過程を経て主人とともに家の中心となって家を切り盛りする人が嫁であったが、戦後の嫁はこのような過程を経ていないと思われるからである。

石名の事例から指摘できることは、戦後においては、嫁が中婆（或いは大婆）になったとしても、戦前のような中婆（或いは大婆）としての役割分担をしなくなり、戦前に見られた中婆（或いは大婆）という位置までには至らないようになったということである。あるいは、戦前の嫁たる者が戦後において中婆（或いは大婆）たる者にはなったものの、戦前の中婆（或いは大婆）が持っていた主婦としての権威を持つことが出来なくなったと言うことである。すなわち、嫁が中婆になって大婆になるという世代変化に伴う嫁の位置変化の觀念と、このような世代交替による役割分担が一致しないようになったと言える。その結果、戦前には嫁、中婆、大婆の間に存在していた位置関係が曖昧になることによって、嫁と中婆、および中婆と大婆との間に葛藤が生じ、戦後の中婆と大婆は相対的な疎外感を抱くようになった。

このように、戦前と戦後の間では嫁に対する觀念に相当な違いが見られ、従って嫁の位置というものも、決して時空を超えて普遍的・絶対的なものではありえない。それは時代と共に変化するものであることが石名の事例からも指摘できるのである。

### 三世代家族における嫁の位置（呉）

#### < 註 >

- 1) 「郷土生活の研究法」『柳田國男全集』28、筑摩書房、1996、141 - 142 頁。
- 2) 本稿での主婦とは、家長の妻で、一家を切り盛りするなど、家事全般を引き受ける女性をいう。カカサ・トジ・エヌシなどと呼ばれ、食物の管理と分配、そして衣服の管理など経済的な役目を持っている。
- 3) 大間知篤三「伊豆大島の婚姻と女性」『大間知篤三著作集』第2巻、未来社、1975、145 頁・148 頁。
- 4) 柳田國男「女性生活史」『柳田國男全集』28、筑摩書房、1996、544 頁。
- 5) 向山雅重「せんだく - 信州伊那地方嫁住みの一問題」『伊那』、伊那史学会、1961、8 - 10 頁。
- 6) これは、昭和 36 年に駒ヶ根市のある主婦の話や、飯田線伊那市駅ホームでの立ち話、伊那郡高遠町のある桶屋のセンダクに関する談話である。「嫁が洗濯をする時には、お許しを得る必要がある、つまり、その時間だけお暇をいただいてすべきである」とか、「洗濯などしているものは一人前の人間ではない」という話を紹介しつつ、洗濯に関わる嫁の存在に言及している。ここでは嫁は常に弱い存在として取り上げられており、既存の嫁の生活を見る上では参考にはなるが、当時の研究者が洗濯に対して抱えていた偏見や、既存の研究の流れを垣間見ることにも出来るといえる。（向山雅重、1961、8 - 10 頁）。
- 7) 主婦権とは、簡単に言えば家庭生活全般において主婦に与えられた権利であるが、民俗学では家長権・戸主権に対応する観念として単に分析概念として捉えるのに過ぎない。法的・制度的地位ではない。
- 8) 倉石あつ子「女の財産」『女の眼で見る民俗学』、高文研、1999、124 頁。
- 9) ここで言う「家（イエ）」とは、行政的な家概念をも含む民俗的な家の概念を指す。いわゆる「同じ竈のご飯を食べる仲間」のことである民俗的な家概念を「イエ」と言うが、これに行政的な家概念も含めて「家」と言う用語を用いる。
- 10) 佐藤利夫『村の生活』、新潟県佐渡郡高千村（現相川町）高千公民館、1961、151 頁。
- 11) 「2000 年世界農林業センサス - 農業集落カード」農林水産省。

主指導教員（荻 美津夫教授）、副指導教員（古厩忠夫教授・藤井隆至教授）